



あまごと



東雲 八夫

凍えた手では、何も温められない。

男は、そう思った。だから、彼女には触れようとしない。

凍えた手では、ナイフを握ることもできない。

男は、左手でビニール傘を持っていた。右手は、ポケットの中だ。

裂く。

かじかんだ心でも、自分を傷つけるのは、簡単だ。きっと、長い付き合いだからだろう。男は、そう思った。

貫く。

慣れていない。だから、両の手を使おうとしていた。震える手を、震える手で、強く握る。

彼女との、別れが近づく。もう、雨は止まなくていい。濡れた心の行き先は、わかっている。

さよなら。この背中が見えなくなったとき、僕は、ナイフを握る。

男は、右手を振った。彼女は、人ごみに消えていく。大きな雨粒が、傘から、したたる。

本当の雨は、いつも見えない。雨ざらしでは、温かい心も、いずれ冷える。そして、冷え切った心は、ささくれる。

そんな心で、何を抱きしめる。傷つけても、心の刃は、消えない。だから、傷だけが増えた。

凍えた手では、何も温められない。だが、彼女を守ることはできる。

傘から、落ちてくる水滴の向こう側。男の目には、ぼやけた背景として、人が映る。

不意に、男の視線は、雨粒を突き抜けた。一度、目を閉じる。見た。雨傘の揺れる、人の海の中。彼女は傘もささずに、立っていた。目が、合った。

なぜ、戻ってきた。男は、そう思った。

彼女は、駆けた。白い息が、尾を引いている。そして、跳躍した。男の胸に、飛び込んだ。

「傘を、持って」

彼女は、笑いながら言った。男は、彼女の頬を流れる雨を、右手で拭った。やはり、男の手は、冷たい。

彼女は、両の手で、男の右手を包んだ。

温かい。

雨は、やまない。それでも、ナイフを握ることは、できない。